

NEWS LETTER

# 都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

66

2010  
1125

朝夕の寒気が身にしみるところとなりましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

都市史研究会ニューズレター66号をお届けいたします。本号では8月に開催されたラウンドテーブル「伝統都市の比較史」、9月に開催された都市史研究会例会およびラウンドテーブル「都市史の現在、そして未来——イギリスと日本——」10月に開催されたワークショップ「徽州商業文書に学ぶ」およびラウンドテーブル「17～19世紀中国の都市と商人」についてご報告いたします。また、本年度のシンポジウムの詳細が決定いたしましたので、告知も掲載させていただきます。

今後とも、皆さまの都市史研究会へのご理解とご助力をお願い申し上げます。

---

## ニューズレター都市史研究の配信方法に関するお知らせ

現在、ニューズレター都市史研究はE-mailやウェブサイトによるPDF配信および郵送による配信を行っておりますが、まことに勝手ながら今後はPDF配信を推進していくこととなりました。皆さまのご理解とご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

なお、現在郵送による配信をご利用の方で、引き続き郵送配信をご希望の方はお手数ではございますが、下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。E-mailによる配信へ変更をご希望の方も、同じく下記までお名前とご希望のお届け先（E-mailアドレス）をお知らせ下さい。

都市史研究センター・とらっど3事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 日本史学研究室内

E-mail: tradcities@gmail.com

Fax: 03-5841-7459（東京大学工学部建築学科伊藤研究室）

## ラウンドテーブル「伝統都市の比較史」

2010年8月19日、20日の両日、ぐるーぷ・とらっど3と飯田市歴史研究所共催によるラウンドテーブル「伝統都市の比較史」が開催されました。フランスから多くの研究者をお招きし、日本人研究者、フランス人研究者が交互に報告を行なうという形式で進行していきました。また会場となった飯田信用金庫大会議室では、ラウンドテーブルの翌日および翌々日に飯田市歴史研究所主催による研究集会も開催されました。今回のラウンドテーブル開催にあたり翻訳、通訳としてご活躍いただいたバルディ・ヤニック氏よりラウンドテーブルの参加記を寄せていただきました。

### 参加記 ―フランス史と日本史の間―

私はこの八月、飯田において行われたラウンドテーブルのために塚田孝先生と吉田伸之先生の報告の原稿を翻訳して、そして、ラウンドテーブルの当日、通訳もしました。

私はフランスの東洋言語文化研究所の博士課程の三年であり、大阪市立大学大学院で塚田先生の指導のもとに日本史・江戸時代について研究しております。フランスでは、日本語や日本文化・日本史を勉強する前に5年間歴史の勉強を大学で行ないましたが、それはほぼ西洋史（フランス史）中心であり、他の国の歴史の授業はほとんどありませんでした。ただ、二年生の時は日本史入門という授業がありました。他国の歴史とフランス史を比較する発言が聞かれましたが、その正当性について疑惑に感じていました。その時は分かりませんでしたでしたが、フランスと日本の伝統都市の比較史のラウンドテーブルに、報告原稿の翻訳と通訳の依頼されたことで今では分かります。その比較は近代化論や目的論の「成果」であり、つまり、昔の社会などの理解を深めるというより、この「成果」はそのイデオロギーの正しさを証明する証拠として出されていたのだとおもいます。

さて、円座で取り上げられた問題はたくさんあったと思いますが、二つのことについて感想を述べたいと思います。

まず、吉田先生の小規模伝統都市の問題提起についてです。小規模伝統都市の研究をするために、その都市の境界を越える必要があります。勿論、その都市の地理を念頭に置いて、社会構造を分析することは不可欠ですが、その伝統都市の周縁を考えて、他の都市や支配のユニット（幕領など）とのネットワークも考えて、社会構造や経済関係と権力関係を分析することや、上のレベルで小規模伝統都市と藩主や幕府との関係を分析することは必要です。つまり、小規模伝統都市の研究問題を全面的に定義しました。

自分の研究テーマは都市との関係は浅いですが、これから吉田先生の問題提起を念頭において、都市の周縁と都市との関係を忘れずに研究を進めたいと思います。

二つ目のポイントは乞食・貧人に対する救済や政策などについてのヨーロッパ・日本の比較史です。ティレ先生はフォブール・サントアントアヌの庶民、特に貧乏の寡婦に対する救済について報告されました。塚田先生は大坂の非人について、特に家督の相続の問題とその家督と町や権力・町奉行との深い関係について報告されました。ラウンドテーブルの時にその話はなかったと思いますが、二日目の夜にフランス人の先生と一緒に塚田先生の報告とアラン・ティレ先生の報告について話をしました。その話のなかで近世におけるイギリスとフランスと日本の乞食・貧人に対する政策や救済を比較することで、面白い結果がでることが想定されました。

自分にとってはその話は重要でした。既述ように今までは比較史に対して疑惑を感じていましたが、この話で分かった事はやはり、専門家が確かなる証拠に基づいて、目的なく、二つ以上の国の歴史の全てを比較するのではなく、その歴史の一部分に注目することに意味があるということです。

最後に飯田の円座で三つ目に分かったことは、このような方法で日本史とフランス史を比較するためにカレ先生のような人々は不可欠だということです。カレ先生は日本近世史の専門家でありながら、フランス史にも詳しい人ですから、フランス史の専門家と日本史の研究者の間で「橋」の役割を果たす人物でもあります。自分もこの役割を果たせる人間になるように頑張りたいと思います。

バルディ・ヤニック（大阪市立大学／フランス国立東洋言語文化研究所）

## 第73回都市史研究会例会

2010年9月17日、東京大学建築会議室にて第73回目となる都市史研究会例会を開催いたしました。当日は岩本馨氏（京都工芸繊維大学）の著作『近世都市の空間構造』の書評を杉森哲也氏（放送大学）が、コメントを登谷伸宏氏（京都大学）が行ないました。日本建築学会若手奨励特別委員会との共催となり、大変活発な議論が行なわれました。以下に参加記を掲載いたします。

### 参加記

研究会は、岩本馨氏の著書『近世都市空間の関係構造』を杉森哲也氏が評し、登谷伸宏氏がコメントした後、休憩をはさんで岩本氏が回答し、続けて全体討論を行う、というかたちですすめられた。

杉森氏・登谷氏はともに、岩本氏が扱う対象の多様性と各論文における着眼点の鋭さを評価する一方で、「ないものねだり」としつつもそれぞれに若干の課題を指摘された。それはおおよそ、①全体に関して「関係」あるいは「関係構造」という語が曖昧であること、②各論文に関して史料の踏み込みが十分でない部分があること、という二点に集約されるだろう。

まず①について。「関係」「関係構造」という語については全体討論でも議論となり、「関係」という言葉を外してもいいのではないかという意見まで飛び出した。何ら「関係」を考慮に入れない都市の研究などあり得ないという意味では、確かに「関係」というのは茫漠とした視角であるようにも思われる。

岩本氏は著書のタイトルについて「空間の関係構造」という語の区切りに意義があるといい、とりわけ地理的に隔たった空間を一緒に考えることの必要性を指摘された。そのような視角の重要性については、とりわけ秩父霊場に関する論文（Ⅱ―第1章）に明瞭に示されていると思われる。個々を見る限りではごくありふれた地方の一寺院でありながら、33ヶ所さらには34ヶ所集まることで個々の加算以上の意味が創出される点がみごとに描かれており、個人的に好きな論文でもある。

一方で、一つの空間においてさまざまな社会集団が結ぶ諸関係という視角も、都市を「関係」から論ずる方法としてあり得るかと思われるが、「空間の関係構造」という方向へ限定すると、そちらの視角が切り捨てられてしまうのではないか。そのような視角は岩本氏の専売特許ではないので特に強調する必要がないということかもしれないが、敦賀の「遊行の砂持ち」に関する論文（Ⅱ―第2章）などは一つの空間（この場合は「砂持ち」という行為か）においてさまざまな社会集団が関係を結ぶことにおもしろさがある。甲府に関する論文（Ⅰ―第2章）も、主要な論点は江戸と甲府という二都市の関係ではなく、甲府における幕府の論理と勤番士の論理の相克という構図であろう。

個別の論文において多様な切り口が岩本氏の著書の魅力であるのは間違いないが、だからこそ全体のまとまりを欠く印象を与える危険性もはらんでいる。全体をまとめる概念として「関係論」という視角を掲げるものの、その視角を研ぎ澄ませようとすればあるいは個別の論文を束縛しかねず、多様な対象を多様な切り

口で扱えるからこそ苦労される部分かと推測される。

②については、各論文の独立性が強いため個別に指摘がなされた。筆者自身が批判的な意識も持たずに論文を読んだときには特に意識しなかったが、杉森氏や登谷氏に指摘されてみれば、もう少し丁寧に議論すべき点があったことも見えてくる。一般的に言えば、明快な構図を見せようとする論文は往々にして実態を多分に単純化してしまうことがあり、逆により踏み込んで実態を描き出そうとすれば、その構図に何重にも留保がついて構図自体が見えにくくなりがちである。岩本氏の描き出す明快で魅力的な構図に対しても、近世都市を研究する杉森氏・登谷氏から見れば、もう少しの踏み込みを求めたく思われるのであろう。

例えば、第三章において水戸の城下町の変化は扱いながらも江戸藩邸がほとんど扱われないことの不備が指摘された。それに関して岩本氏は、水戸藩上屋敷関連の資料を探すのみならず、水戸藩と同様に将軍の近親の藩である館林・甲府藩の藩士は幕臣の性格を併せ持つ部分があるということで、水戸藩と併せて検討する余地がある旨を回答された。今後も魅力的な論文を発表されることを期待したい。

加藤悠希（日本学術振興会／筑波大学）

---

## ラウンドテーブル「都市史の現在、そして未来——イギリスと日本——」

2010年9月18日、坂下史氏（東京女子大学）の科研（基盤研究C）「医業と農業と慈善を結ぶ『草の根啓蒙』の実相」とぐるーぷ・とらっど3、都市史研究会によるラウンドテーブルを開催いたしました。当日はレスター大学よりRosemary Sweet氏をお招きし、イギリスにおける都市史研究の歴史、今後の課題などをご報告いただきました。また、岩本馨氏から日本の研究史について報告が行なわれ、活発な議論が展開されました。

### 参加記

今回のラウンドテーブルはレスター大学からローズマリー・スウィート教授を、京都工芸繊維大学から岩本馨氏を招いて行われた。スウィート教授は都市史だけでなく、古物収集家(antiquarian)などについても研究をなされているが、今回の講演では「イギリス都市史における新たな方向と課題」として、これまでのイギリス都市史の研究を概観するとともに、これからの研究の方向性について講演なされた。当日はスウィート教授の講演の後、岩本氏による日本近世都市史研究における研究史と論点が報告され、次いで質疑応答が行われた。

スウィート教授の講演は、大まかに以下のような内容であった。1960年代、多くの個別都市の研究がなされ、イギリス都市史は大きく展開した。その際、経済社会史と都市史は密接な関係にあり、社会科学的な手法が重視されていた。その後、いわゆる言語論的転換をうけ、都市史はアイデンティティや表象といったテーマを多く扱うようになる。さらに、「空間的転換」(the spatial turn)と呼ばれる、都市の空間を捉えなおし、物質的環境を歴史のエージェンシーとして捉える、という研究がなされてくる。それは当然歴史における人間のエージェンシーの相対化を伴う。スウィート教授によれば、この「空間的転換」には例えばgoogle mapなどに見られるような、デジタルテクノロジーによるインパクトが大きいという。

スウィート教授はさらにこれからの研究課題として、環境史との接続や、都市の遺産(heritage)と環境との関係、現代都市における過去の演出のあり方に対する注目を挙げた。また中国都市などにヨーロッパ以外の都市にも目をむけることにより、都市化や近代化のヨーロッパモデルの相対化を指摘された。

次に岩本氏が80年代からの日本都市史研究の進展を概観した。そこでは90年代以降の大きな特徴として、

日本史学と建築学との学際的研究の進展が挙げられた。「建築物」への着眼は、スウィート教授が指摘しているようにイギリス都市史においても注目を集めている。また岩本氏から近年の研究動向として、「空間」という概念を拡張し、様々な関係の糸で繋がる社会を総体的に捉える視座が指摘された。

質疑応答では、スウィート教授が日本の土地所有のあり方について質問をなされ、非常に興味を持っていた様子が印象深かった。日本の城下町でみられるような、多様な土地所有のあり方に大きな興味を持っていられたようである。また日本都市史における時代区分についても質問なされていた。時代区分については岩本氏からもイギリス都市史における区分の質問がなされ、やはり時代区分とその基準というのは歴史学においては非常に重要性を持っているということが改めて感じられた。

個人的な感想としては、筆者は近世イングランドの宗教を専門としているため、特に宗教改革による都市への影響に改めて興味を抱いた。スウィート教授も宗教改革によるインパクトの重要性を指摘しておられたが、宗教改革と都市というテーマはイングランドにおいては近年になってようやく注目されてきたテーマであり、さらなる研究の蓄積が必要とされている。都市における宗教の役割を改めて考えてみることは、各国の都市の比較を行う際にも有益であろう。都市の構造や機能、建築、また都市を構成する共同体などは、その都市の住民の宗教を反映しているはずであり、日本の都市とイギリス都市の宗教による影響の比較検討といった研究は、非常に興味深い成果を生むのではないだろうか。今後の研究のさらなる進展を期待したい。

長田雄人(東京大学大学院人文社会系研究科)

---

## ラウンドテーブル「17～19世紀中国の都市と商人——徽州と広州」

2010年10月9日、10日に復旦大学の王振忠氏をお招きし、ワークショップおよびラウンドテーブルを開催いたしました。一日目のワークショップ「徽州商業文書に学ぶ」では王氏より史料の内容や調査の経緯などについて紹介していただきました。また、翌日のラウンドテーブルでは王氏に加え、熊遠報氏（早稲田大学）、井上徹氏（大阪市立大学）からも研究報告が行なわれ、充実した二日間となりました。以下にラウンドテーブルの参加記を掲載いたします。

### 参加記

当日は、3つのセッションに先立って、吉田伸之氏から本会の趣旨について説明があった。そこでは比較類型把握という切り口に伴って導き出された、次のようなポイントが提起された。それは生産・流通・販売を含めた全体構造、さらに商人の類型・位相・結合形態といった要素を把握し、他地域との比較を通して理解しようとするものである。

そうした文脈の中で中国における上記の要素の具体像が、3人の報告者によって論じられた。キーワードは、徽州商人と広州であった。

熊遠報氏は北京に設置された地縁結合の会館について、その場所や内部構造などにも詳しく言及された上で、会館の機能は科挙受験者の宿舍や官僚のサロンが主であったという見方ではなく、実際には茶商人を中心とする徽州商人たちの存在が重要であったと論じられた。一方、王振忠氏は南方、すなわち広州に向かった徽州商人の実際について、現地の個人が所有していた貴重な史料を用いて明らかにされた。これまで存在こそ知られていたものの、詳しい内実が知られていなかった広州への茶・磁器・墨の運搬について新たな知

見を与えられたものといえる。井上徹氏は明代の広東省における徴税システムの一貫性について詳しく紹介され、その中で徴税を請け負った商人間の競争・確執について明らかにされた。それは大都市における外来人たちがその地での徴税権を獲得するために、それぞれに味方する官人をも動かし、体制を左右してゆく過程であった。

これらの報告を受けて行われた討論は、外来の商人たちが北京や広州といった大都市に移動し、自らが持つネットワークを強化してゆく過程を解明するためのものであったという点において極めて統一性のある内容であった。熊氏の報告に対しては、会館の機能を論じるためにむしろ茶の「行」（その定義から議論の対象となった）・店舗など、徽州商人全般の北京における存在形態の諸相そのものに議論が及び、王氏に対しては逆に商人を送り出す徽州内部における地域格差と、その格差が生じる歴史的・地理的前提が問われ、井上氏に対しては徴税請負というシステムが確立していった経緯・歴史的背景や、互いに「無頼」と呼び合っ排拒しあう外来者同士の争いがあったことを前提として、その「無頼」とはいかなる人々であったのか、などが議論された。

こうした議論をさらに発展させて考えるならば、これらの外来商人を受け入れる都市の構造をいかに理解するかという切り口もありえよう。例えば熊氏の報告から、徽州の商人のみならず科挙受験者・官僚等も広く受け入れた会館という外来者受け入れの器は、北京在来住民が創設したものではなく、外来者である徽州人であったことが知られる。さらにこの会館を資金面で支えていたのは北京在住の徽州人（主に茶商人）であった事実も見逃せない。また王氏が指摘したように、広州の珠江南岸に、徽州商人の交易品を受け入れそれらを加工することのできる施設が設けられたように、これもまた外来者のための外来者による施設と位置づけられよう。福建から広州に来た商人が徴税請負人の牙行として当地で行われた遠隔地商業に関わっていたことを例示した井上氏の報告にしても同様の見方ができよう。このように考えてみると、商人を送り出す側と受け入れる側はその出自から言えば一体の存在であるということができ、送り出す側は周縁地域で、受け入れる側は都市部という明確な区分けができないということになる。こうした実態は、例えばフィリッパ・カーティンの交易離散共同体すなわちトレード・ディアスポラの議論なども想起させる議論であると言えるが、翻って、特定の都市において徽州商人・山西商人など多数の外来集団が織り成す複層性に、その都市に自らのアイデンティティを持つ在来住民（この概念も多分に議論の余地があるが）という要素を加えて考えることで、当時の都市の成り立ち、すなわち地縁に基づく都市の分節構造を実態に即して理解する一助になるのではなかろうか。

プログラムにはなかったが、最後に設けられた総括討論において、吉田氏は今後の方向性として、店舗や作業場などの具体的空間形態の解明・中国の牙行と日本の仲買の比較・棍徒や無頼の実態、そして近世に現れた世界的な経済変動との関わりといった諸問題を提起された。今後これらの問題点が具体的に検討・議論されることを期待したい。

藤原敬士（東京大学大学院総合文化研究科）

## シンポジウム開催のお知らせ

このたび、都市史研究センター（とらっど3）+都市史研究会では、12月4日（土）5日（日）と2日間にわたって、下記の要領で、都市史研究会シンポジウムを開催いたします。今年のシンポジウムは、「伝統都市論」をテーマとし、8月に完結した、シリーズ『伝統都市』全4巻（東京大学出版会）をとりあげ、1)各巻テーマに関連させた若手研究者による個別報告会、2)書評会、3)ラウンドテーブルという3本構成で行います。ふるってご参集くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、シリーズ『伝統都市』の購入をご希望の方は、10ページに定価より2割引きで購入できる注文書を掲載しております。この機会にぜひお買い求めください。

日程： 2010年12月4日（土）・5日（日）

場所： 東京大学本郷キャンパス工学部2号館9階  
プレゼンテーションルーム93B

テーマ： 「伝統都市論」

主催： 都市史研究会+とらっど3

参加費： 500円

1日目：12月4日（土） 13時～17時

【個別報告】（各50分）

- 1.坪内綾子（日本女子大学）「中近世における春日信仰と奈良町ー春日講を中心としてー」
- 2.東辻賢治郎（東京大学）「ロンドン・ムアフィールドズについて」
- 3.登谷伸宏（京都大学）「陣中から惣門之内へー公家町の成立とその空間的特質ー」
- 4.角和裕子（東京大学）「江戸の粉屋と水車稼人」

2日目：12月5日（日） 10時～17時

『伝統都市』全4巻(東京大学出版会、2010年刊)を読む（10:00～12:00）

報告者：石井規衛（東京大学・ロシア史） 五味文彦（放送大学・日本史） 近藤和彦（東京大学・イギリス史） 陣内秀信（法政大学・西洋建築史） 高橋康夫（花園大学・日本建築史）

ラウンドテーブル「伝統都市を比較する」（13:30～17:00）

参加者：石井規衛・五味文彦・近藤和彦・陣内秀信・高橋康夫

吉田伸之（東京大学・日本史、編者）・伊藤毅（東京大学・日本建築史・編者）

司会：杉森哲也（放送大学・日本史）・高澤紀恵（国際基督教大学・フランス史）

懇親会：ピアンタ本郷（文京区本郷2-30-7 TEL03-5804-0255） 17時30分より開始 会費5000円（予定）



## 『伝統都市』（全4巻）出版のお知らせ

2010年5月に開始した『伝統都市』（全4巻、東京大学出版会）の出版が8月に完結いたしました。2006年から2007年にかけて、都市史研究会例会で行われた準備報告会の成果が集約されています。7頁でもご案内いたしましたとおり、本年度のシンポジウムでは、本シリーズを取り上げます。

パンフレットより内容紹介と目次を転載いたします。また、本ニューズレター読者を対象といたしまして、各巻税込価格5040円より2割引でご購入いただける注文書もご用意いたしました。是非ご活用ください。

### 伝統都市1 アイデア

都市の社会=空間は、意識されるか否かによらず、つねに特定のアイデアにもとづいて企画され、また改造される。宗教コスモロジー、公権力の構造理念、市民的あるいは階級的な共同の観念・ユートピアなどが伝統都市には積層し、せめぎあう。本巻では、伝統都市を解説するキーワードとして〈アイデア〉を積極的に位置づけ、都市の社会=空間に重層するアイデアの解説、アイデアの担い手と実行主体、そして現代都市アイデアによる解体と相剋から、都市アイデアを浮かびあがらせる。

目次： 序 方法としての都市アイデア 伊藤毅（東京大学）

#### I ひろげる

- 1 移行期の都市アイデア 伊藤毅
- 2 地中海都市 陣内秀信（法政大学）
- 3 都市図屏風とアイデア 杉森哲也（放送大学）

#### II 考える

- 1 豊臣秀吉の京都改造と「西京」 三枝暁子（立命館大学）
- 2 萩城下の都市民衆世界 森下 徹（山口大学）
- 3 幕末・明治初期の横浜 青木祐介（横浜都市発展記念館）
- 4 近代移行期の東京 松山恵（明治大学）
- 5 社会主義の都市アイデア 池田嘉郎（東京理科大学）

#### III さぐる

- 1 開京 禹成勲（七宝建設）
- 2 バスティーード 加藤玄（日本女子大学）
- 3 町家 高村雅彦（法政大学）
- 4 与板 朴澤直秀（岐阜大学）
- 5 オラン 工藤晶人（大阪大学特任研究員）

### 伝統都市2 権力とヘゲモニー

伝統都市における支配権力や社会的権力、あるいはヘゲモニー主体の具体相をとりあげ、社会的結合論の視点から都市権力論の方法・論点をさぐる。都市の権力は、都市を基盤とする広域支配を担う権力機構、都市内行政の権力主体、社会レベルにおける私的権力のヘゲモニーなど多義的である。本巻では、個別的な都市事例を素材とし、狭義の権力構造から、権力の空間、都市社会の統合と秩序化の諸局面、および社会との相剋、移行期における変容・変革などの問題にせまる。

目次： 序 都市の権力とヘゲモニー 吉田伸之（東京大学）

I ひろげる

- 1 武士と都市 五味文彦（放送大学）
- 2 都市法 塚田 孝（大阪市大学）
- 3 革命前夜のベルリン 山根徹也（横浜市大学）

II 考える

- 1 アテナイ民主政の警察機能と市民 橋場 弦（東京大学）
- 2 君主制フィレンツェの都市改造 野口昌夫（東京芸術大学）
- 3 都市周縁の権力 高橋慎一郎（東京大学）
- 4 解体される権力 横山百合子（帝京大学）
- 5 近代中国の租界 吉澤誠一郎（東京大学）

III さぐる

- 1 バグダード 清水和裕（九州大学）
- 2 ペテルブルク 青島陽子（ITP派遣生）
- 3 長岡と蔵王 武部愛子（東京大学学術支援職員）
- 4 軍都金沢 本康宏史（石川県立博物館）

### 伝統都市3 インフラ

都市を巨大な人工物とみたとき、都市の骨格をなす道路や橋、河川・運河・水路などの基幹施設、都市生活の生命線となる上水道や燃料、不断の管理によって都市機能を維持する塵芥や下水の処理などが有効に稼働していることが要求される。本巻では、都市を物的に成り立たせているさまざまな局面に焦点を当て、その全工程、それを担った社会集団を念頭に置きながら、インフラのもつ空間的・社会的意味を伝統都市のなかに探り、その近現代の変容の諸相を描く。

目次： 序 都市インフラと伝統都市 伊藤 毅（東京大学）

I ひろげる

- 1 運河都市 鈴木博之（青山学院大学）
- 2 近代市街橋のデザイン 篠原 修（政策研究大学院大学）

II 考える

- 1 古代都市街路 伊藤重剛（熊本大学）
- 2 城下町 岩本 馨（京都工芸繊維大学）
- 3 藩邸 岩淵令治（国立歴史民俗博物館）
- 4 寺内 杉森玲子（東京大学）
- 5 都市再開発 初田香成（東京大学）

III さぐる

- 1 道 宇佐見隆之（滋賀大学）
- 2 穴蔵 谷川章雄（早稲田大学）
- 3 ニューゲト監獄 栗田和典（静岡県立大学）
- 4 高輪海岸 吉田伸之（東京大学）

## 5 不動産 森田貴子 (早稲田大学)

### 伝統都市4 分節構造

都市における社会=空間構造の基盤を構成するのは多様で個性的な社会的結合体である。伝統都市において、血縁・地縁・職業・宗教・文化などのさまざまな契機によって形成される諸集団が、相互に複層的な関係をもつことによって生みだされる単位社会のあり様を抽出し、その分節的な社会=空間構造の特質について具体的に考察する。そして、伝統都市間の類型的比較を試み、あわせて、近代への移行期における分節構造の変容過程の特質を明らかにする。

目次： 序 ソシアビリテと分節構造 吉田伸之 (東京大学)

#### I ひろげる

- 1 江戸・内・寺領構造 吉田伸之
- 2 聖俗の結合 近藤和彦 (東京大学)
- 3 都市空間の分節把握 伊藤裕久 (東京理科大学)

#### II 考える

- 1 中世ジェノバの「家」 亀長洋子 (学習院大学)
- 2 近世パリの街区 高澤紀恵 (国際基督教大学)
- 3 胡同と排泄物処理システム 熊遠報 (早稲田大学)
- 4 近世湊町と地域特性 吉田ゆり子 (東京外国語大学)
- 5 明治初年の遊廓社会 佐賀 朝 (大阪市立大学)

#### III さぐる

- 1 ミドルマン 岩間俊彦(首都大学東京)
- 2 ベリンダ 飯島みどり (立教大学)
- 3 社家 竹ノ内雅人 (飯田市歴史研究所)
- 4 浜人 山下聡一 (大阪市立大学GCOE特別研究員)
- 5 囃子方 佐藤かつら (鶴見大学)

## 『伝統都市』注文書

A5判/上製カバー/縦組/平均320頁/各巻税込予価5040円より2割引 (4032円)

### シリーズの特色

- “伝統都市”とは何か、著しい飛躍を遂げた都市史研究の到達点を示す。
- 現代都市が抱える問題の解決の糸口を歴史的根源からさぐる。
- 4つのキー概念によって時代と地域を横断し、都市と社会を読み解く。
- 日本・アジア・欧米をフィールドとする第一人者が都市を通して歴史の魅力を描き出す。

### ご注文方法

- 郵便、ファックスまたはメールからご注文いただけます。
- 郵便またはファックスをご利用の方は、このページの「ご注文内容」「お客様情報」をご記入の上、郵便の場合は都市史研究センター・とらっと3事務局へ、ファックスの場合は東京大学伊藤研究室までお送りください。
- メールにてご注文される方は「ご注文内容」「お客様情報」を下記Emailアドレスまでお知らせください。

都市史研究センター・とらっと3事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 日本史学研究室内

Email: tradcities@gmail.com

Fax: 03-5841-7459 (東京大学工学部建築学科伊藤研究室)

### 注意事項

- 送料はお客様に実費ご負担いただきますのでご了承ください。
- お支払は商品に同封する振込用紙にてお願いいたします。
- 公費でのお支払にも対応させていただきます。商品の郵送時に必要書類を同封いたしますので、「公費払い用書類の宛名」に書類に記載する宛名(大学名など)をご記入ください。
- ご注文いただいた内容は、毎週金曜日に取りまとめて東京大学出版会に連絡いたします。そのため、商品がお手許に届くまでお時間を頂戴する場合がございます。どうぞご了承ください。

### ご注文内容

- ・全4巻申し込みます ( セット)
- ・1 イデア ISBN 978-4-13-025131-0 ( 冊)
- ・2 権力とヘゲモニー ISBN 978-4-13-025132-7 ( 冊)
- ・3 インフラ ISBN 978-4-13-025133-4 ( 冊) 2010年7月以降のお届けとなります。
- ・4 分節構造 ISBN 978-4-13-025133-1 ( 冊) 2010年8月以降のお届けとなります。

### お客様情報

ご芳名

ご所属

お届け先ご住所 〒

電話番号 ( )

公費払い用書類の宛名(公費払いをご希望される方のみ)

## 「小城故事」：建国後曲阜の都市建設

彭浩（東京大学）

2009年春に都市史研究会などによって主催されたラウンドテーブルで、私は王軍著『北京再造—古都の命運と建築家梁思成一』（多田麻美訳、集広舎、2008年）について書評を行った。質疑の時、私の故郷曲阜の状況についても聞かれたが、当時うまく答えることができなかった。しかしそれをきっかけに、曲阜の都市デザインに関心を持つようになり、ついでに時に地図や写真を収集したり、親戚から話を聞いたりした。今回、エッセーの執筆にあたり、これまで集めてきた断片的な資料を少し整理して、身の程知らずではあるが王軍書をまねて、建国後曲阜の旧城保全と都市開発について簡単に紹介していきたい。

曲阜は中国山東省の中南部に位置する。いま、主に孔子の故郷として世に名を馳せているが、その最盛期は遙か遠い周代であり、その時に曲阜は魯国の都だった。時代が下るにつれ、近辺の兗州や済寧などの都市の成長により、地域の政治中心や商業中心の地位を失い、主に儒学の聖地として文化的な要素を残している町になった。名の由来は「魯城の中に阜（おか）あり、曲がりくねって七・八里長い」という文である。

前漢武帝の時期から、儒学は帝王の支持を得て、長期にわたり支配イデオロギーに取り入れられていた。王朝の交替を問わず、孔子の子孫は朝廷から、儒教の「祭主」のような地位に置かれ、曲阜の町周辺を廟田として受領し、代々高い爵位を授けられた。それ故、この町は悠然として2000余年の歳月を過ごしていた。

私も郷土愛が骨に沁み込んでいる人間。異国の町で歩く時も、しばしば曲阜のことを思い出す。その度に、テレサ・テンが歌った「小城故事」のリズムはよく耳のそばに響いてくる。「小城、故事多く、喜びと楽しみ、満ちあふれる。……見れば、一枚の絵に似たり。聞けば、歌の如し」。いま執筆中の心境もまた同じだ。

私が生まれ育った実家は町の西にあたる「西関」と呼ばれている地域にあった。孔子廟の最も近い壁までの直線距離はわずか200メートル、家の2階の窓から孔子廟の中心的建物である大成殿の大きな屋根が望める。私の通った小学校は町の東いわば「東関」にあったため、通学の道はこの孔子廟を迂回するルートであった。

孔子廟はすなわち城の中心なり。いま見られる城内の主な古建築は明清時代のものである。明の正徳6（1511）年、孔子廟は農民一揆によって一時的に占領された。一揆が抑えられた後、朝廷は保護のため、孔子廟を取り囲む城の建築を決めた。工事はおよそ10年間を経てようやく完成。城壁の高さは2丈（1丈≒3.3メートル）、厚さは1丈、堀の深さと広さはいずれも1丈、周囲は4キロメートル余にわたり、5つの城門があった。すなわち南の「仰聖門」、東南の「崇信門」、東の「秉礼門」、北の「延恩門」、西の「宗魯門」で、城門のうえには櫓も建てられた。



南門(1925年)



東南門(1925年)

発掘調査によると、魯国の古城の面積はおよそ10平方キロメートルあったという。明の曲阜城は、古城の南西の隅に位置し、規模をかなり縮小したもので、廟城とも称された。孔子廟の傍には、孔府と呼ばれる孔子の直系子孫の屋敷があり、傍系の屋敷は大体城の東にあり、役所や学校などの公共施設は西にあった。そのほか、顔子廟と庶民の住宅もあり、顔子廟は、孔子の自慢の弟子である顔回を祭る

施設で、城の北東部に位置する。顔子廟の前には「陋巷街」という横町があり、この名前は『論語』雍也編、「一簞の食、一瓢の飲、陋巷にあり、人はその憂いに堪えず、回やその楽しみを改めず」という顔回を称賛する孔子の言葉に由来している。ちなみに、「陋巷街」も私の通学路の一部、小学生時代はほぼ毎日このあたりで遊んだりした。

城の外にも、名所がある。北の門から出ると、長さが1キロメートルの神道があり、その先は、孔林と呼ばれる、孔子の墓を含む孔氏一族の陵墓。面積は2万平方キロメートルに達し、貴族の陵墓として最大級のものと言っても過言ではない。一方、城の北東郊外には、魯国の開祖を祭る周公廟がある。現在の周公廟は、孔子廟・顔子廟と同じ明の建築で、故宮のように赤い壁と黄色の屋根を持っていて、なかなか上古の雰囲気を感じ取れない。

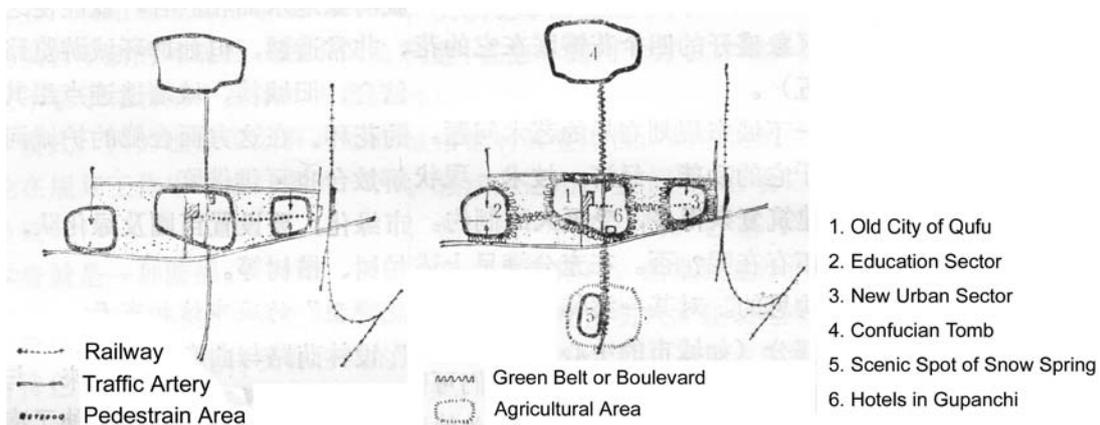
この明代に建築された城(旧城)の構造は、民国期まで大体維持されてきたが、近代以後の戦争や革命による被害にあった。1930年代、軍閥による内戦で、城門は砲撃されて壊れ、その後部分的に修復されるなど、一連の兵難を何とか乗り越えてきたが、70年代に至ると、「批林批孔」運動にさらされ、ひどい破壊を被った。

一般人にとって、現代革命家の林彪と古代思想家の孔子との接点は、なかなか考えにくい、「偉大」なる毛主席は林彪と孔子を結びつけ、孔子は極悪非道の間人で、その教えは封建的であるのに、林彪はそれを復活しようとした人間と主張し、両者を排斥した。鶴の一声はやはり響きが遠い。加えて、四人組が周恩来を総理の位から引きずり下ろそうとする政治的陰謀もあったという。この運動はますます盛んになり、民衆は大成殿の前で批判大会を開き、紅衛兵たちは石碑や牌楼などを破壊したりした。そして1978

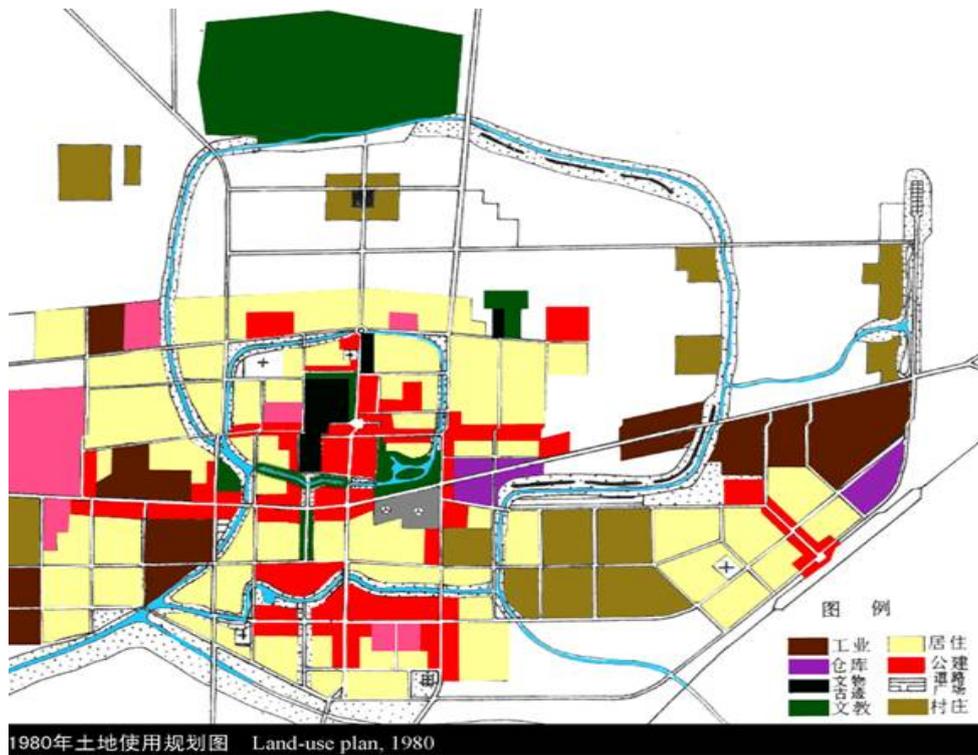
年に至ると、城壁も取り壊された。残されたのは南と北の城門と、東南・東北の角のみとなった。

70年代末、文化革命は終わり、改革開放が始まり、曲阜県は都市開発の計画に乗り出した。その時、計画のアイデアに大きな影響を与えたのは、建築家の呉良鏞である。呉は中国建築史の第一人者である梁思成の弟子。梁は建国直後、北京の都市改造について、旧城を丸ごと保護し、郊外で新市街を開発すると主張したが、天安門を全国の政治的中心とし、社会主義国家の首都は、必ずや全国の大工業基地となすという国家指導者のアイデアと相いれず、実現できなかった。しかし、梁思成の思想は呉良鏞によって継承され、呉が1978年に提出したのは、「十字花卉」という形の計画案。すなわち、旧城は十字の中心、北の「花卉」は孔林、東は新市街、南は緑地、西は教育区という構図に受け継がれた。この案の心髄は、やはり旧城の保全と環境の維持を前提に、開発を別所で行うという点にあると考えられる。当時、南は主に農地と森だったので、それを基礎に景勝地を作るのが呉の狙いであった。そこには、環境保護の意識も含まれている。また、西は50年代に設立された曲阜師範大学がすでにあり、西を教育区とするのはこの点を生かすつもりだったことは、想像に難くない。

1980年、曲阜県は「土地使用計画図」を作成した。これは町割りのような都市計画図であり、図の上はいろんな色に染められている。黒は古建築群、赤は公共施設、こげ茶は工業区、ピンクは教育施設、淡黄は住宅地、黄土は農地を示している。これによれば、工業地帯を西に置き、南で多くの公共施設を設置することとなった。南の開発は、呉良鏞案との最大の相違点で、以後の都市開発に大きな影響を与えた。



呉良鏞の手書き計画図



1980年計画図

80年代以後の経済の高度成長に伴い、旧城の中には、商店・劇場・ホテルなどの多くの公共施設が建てられた。この中で特に注目されるのは2点ある。1点目は、曲阜劇院・新華書店を除いて、ほかの主立った建物が「大屋根」、すなわち四つの角が跳ね上がった中国式の屋根をかぶらせられたこと、2点目は、新建築の高さが孔子廟の大成殿を超えてはならないという制限で、この2点は、伝統の維持と建築様式の一体化から考えると、かなり有益である。また、ここでも王軍書で紹介された梁思成の建築思想が思い起こされる。梁は中国の古建築を研究し、古建築の特色を継承すべきと唱え、古建築の特色が「大屋根」でなく、骨組みにあるのだと主張したが、その考えは社会から理解を得られなかった。50年代前半、「大屋根」を被る建物が一時的に流行っていた。そして梁は、現実に妥協しつつ、せめて建築様式の統一性は保つべきと訴え、そこから「大屋根」建物の普及を支持した。皮肉なことに、1955年前後にはこれが復古主義論として批判を浴びることになった。また、古都の景観を守るため、高層ビルの制限を提案したが、これも受け入れられなかった。王軍書からは、高い期待と情けない現実との落差に苦しむ巨匠のせつなさが感じられる。

しかし、同じ誤りを繰り返さなかったという意味で、曲

阜は幸運であった。城内の建築様式の統一性に触れると、孔子廟の東隣、孔府の前に位置するホテル闕里賓舎を語らざるを得ない。これは梁思成に師事した建築家戴念慈の傑作。全体的には江南庭園式、灰色が主題色であり孔府と一致し、孔子廟と対照的であり、周辺の古建築と妙に調和している。



闕里賓舎

1994年、曲阜市（1986年市となる）は新たな都市計画を作り、「十字花卉」という形の全体構造を維持し、南に新市街を開発することを明確化した。この計画はすぐ実施に移り、南で商店・住宅地が次々建てられ、市政府も南遷した。また、二つの大規模な擬古的建築群も前後して作られ

た。一つは論語碑苑、もう一つは孔子研究院で、両者はそれぞれ大成路の東と西に位置する。前者は江南式庭園で、全国各地の書家による論語に関する揮毫が壁や石碑に刻まれている。後者は呉良鏞を責任者として設計されたもの。中心建築は雄大な宮殿風の建物で、いまよく見られる古建築の曲面屋根でなく、孔子が生きた春秋時代によく使われた直面の屋根が設けられた。

2002年には城壁の再建工事も始まった。再建は取り壊された材料を再利用し、もとの状態にほぼ忠実に再現されている。ただし壁のなかには土がなく、空いている。この空間は博物館として利用される計画だった。城壁の再建の際に、交通の利便性も求められ、12の城門は設置された。



南門（現在）



東南門（現在）

また、伝統重視の機運に乗って、古建築の様式と調和できないことを理由に、新華書店・曲阜劇院・第一百貨大樓などが取り壊された。城内の新しい建築は一律に擬古的な

ものかわり、私が通った小学校も孔府の大門と似たような門が建てられた。最近、新市街の南の大沂河に「大成橋」と命名された壮麗な石拱橋が架けられた。橋の両側に回廊が付けられ、橋脚に古代楽器を主題とする彫刻がある。河の両岸は公園として開発され、朝晩にはトレーニングに来る人も多い。

一方で、復元される目処の立たないところもある。南への新市街開発に伴い、緑地は急速に減少した。建築工事の増加により、市内の空気は悪くなり、幼い頃よく見られるカラスや鶴などの鳥の姿が消えた。「緑化」のスローガンによって人工の芝生を植えることはすぐにできるが、木の大量の伐採による環境破壊は、なかなか短期間で回復できるものではない。そして残念なことには、四合院などの古い住宅の保護には、全く目を向けられていない。僅かに残された古い住宅も速いペースで取り壊され、取って代わったのは擬古的なもの。また、堀は一度修繕されたが、水質は悪く、ゴミなどが水面に漂っている。公衆トイレは少なく、かつ汚い。細部への配慮はまだ足りず、建築の個性やデザインの繊細さは欠ける。

最近、曲阜・済寧・兗州を合併して大曲阜を構築しようとする計画が議論されている。曲阜の知名度を利用して三地の経済発展を推進するというのが狙いであるが、「大」という字を付けると、恐ろしい結果がもたらされるかもしれない。なぜならば、一旦大きな注目を浴びると、様々な分野のいわゆる権威の意見が寄せられ、建築家の意見を尊重してきたこれまでの市政府側の姿勢が維持できなくなり、逆に都市計画の妨害になる恐れがあるからである。

いまの曲阜は美しい景観を呈している。しかし外見のみが重要視される恐れがある。環境や人文的な要素にも配慮すべきである。また、私にとって、幼年の思い出を載せてくれた多くの建物が姿を消したのは、すごく残念なこと。そして現存している建築から、歴史的な断層があるように感じる。つまり、建国後およそ半世紀の歴史を証言する建物はほとんど見られない。

私は建築家ではないから、都市デザインについて専門的に評価する力がなく、ただ故郷への深い思いと、歴史を勉強する人間としての直感で主観的な意見を述べた。私は、旧城の保全・伝統の重視・建築様式の一体化などから、曲阜の開発を嬉しく見守り、このうえで住民が快適に過ごし、

観光客が気楽に楽しめる町になるよう期待している。最後、地元の人間としての宣伝を忘れてはいけない。「人生、一休み」と思う時、ぜひ曲阜に遊びに来てください。小城、故事多し。

【附記】本稿に使っている多くの写真や計画図などの画像資料は、曲阜市文物管理委員会と曲阜市規画局の方々から提供されたものです。ここで、感謝の意を申し述べます。

---

News Letter 都市史研究 Vol. 66  
2010年11月25日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内  
編集担当：三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）  
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）